

## 【活動報告】

平成30年度東京都公文書館企画展

### 「東京の島々

### ～伊豆諸島・小笠原諸島の歴史と文化」

東京都公文書館 史料編さん担当

小粥 祐子

#### はじめに

東京都には東京から南に約100km～1,000kmの太平洋上に点在する大小200余の島々があり、伊豆諸島と小笠原諸島に分けられている。

平成30年(2018)は、伊豆諸島が静岡県から東京府に移管されて140年(明治9年:1876移管)、小笠原諸島が日本に返還されて50年(昭和43年:1968返還)という節目の年であった。

そこで、今年度は、7月19日(木)から9月26日(水)まで「東京の島々～伊豆諸島・小笠原諸島の歴史と文化」展を開催した。

本展示では、東京都公文書館所蔵の江戸時代の地誌・絵図類、江戸時代～明治初年の流人帳、重要文化財「東京府・東京市行政文書」等の中から、島しょ地域に関する資料を紹介し、伊豆諸島と小笠原諸島の歴史と文化に光を当てた。

#### 1 展示の構成と概要

本展示は以下5つのコーナーで構成した。

- I 島々への眼差し - 地誌が描く江戸時代の島しょ地域
- II 八丈島流人アーカイブズ
- III エキゾチックな観光地の成立
- IV 無人島から小笠原諸島へ
- V 伊豆諸島と小笠原諸島の文化財

##### I 島々への眼差し - 地誌が描く江戸時代の島しょ地域

本コーナーでは、江戸時代に書かれた伊豆諸島に関する地誌・絵図類を紹介し、当時の伊豆諸島の姿と江戸の出版文化人が島々に向けた眼差しについて取り上げた。

江戸時代の伊豆諸島は幕府の直轄領で、寛文10年(1670)



図1 ポスター

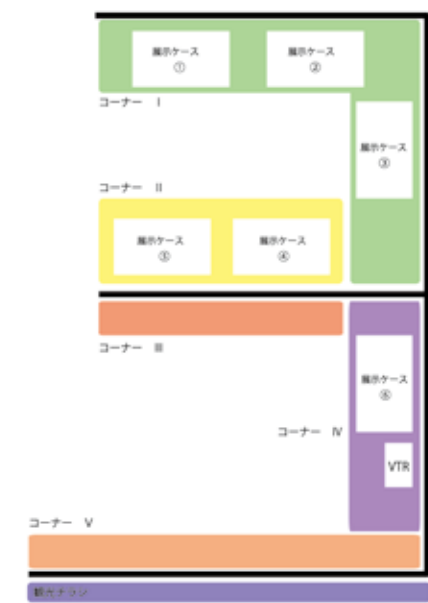


図2 展示室内の配置図

には伊豆・<sup>にらやま</sup>葦山代官の支配下となった。伊豆諸島は江戸時代以前から流罪先としての歴史があったが、8代将軍・吉宗が寛保2年(1742)に定めた「御定書百箇条」によって、制度的にも流刑地として認められることとなった。一方で、江戸向けの商品生産地としてもつながりが密接になり、人々の島への関心は高まっていった。

こうした中、代官をはじめ、さまざまな人が島々を巡検（見）するようになり、比較文化的な考察を加えた地誌・紀行文が数多く出版されるようになった。また、伊豆諸島の島々を詳細に表わした絵図も作られるようになった。

本コーナーで取り上げた地誌は、『伊豆海島風土記』、『七島巡見志』、『八丈誌』、『七島日記』、『八丈実記』である。このうち『八丈実記』は、八丈島へ流された近藤富蔵守真が島での60年間におよぶ流人生活を著したもので、当館では稿本29冊分（現在は、再編して36冊）を所蔵している。富蔵は、旗本・近藤重蔵守重の長子として文化2年(1805)に江戸で生まれた。文政9年(1826)、父親と隣家との争いに巻き込まれ、隣家一家を皆殺しにしてしまい、翌年八丈島に流罪となった。

いずれの地誌も、島々の様子が文章によって記されているのはもちろんのこと、島々の地理関係・珍しい魚貝類や動植物・人々の生活と生産活動・踊りや島相撲・牛合わせといった民俗行事などが絵でも記録されている。特に、動植物については南国独特の色鮮やかな彩色で描かれているのが印象的である。



図3 「糸の染色と機織り」『七島日記巻三』

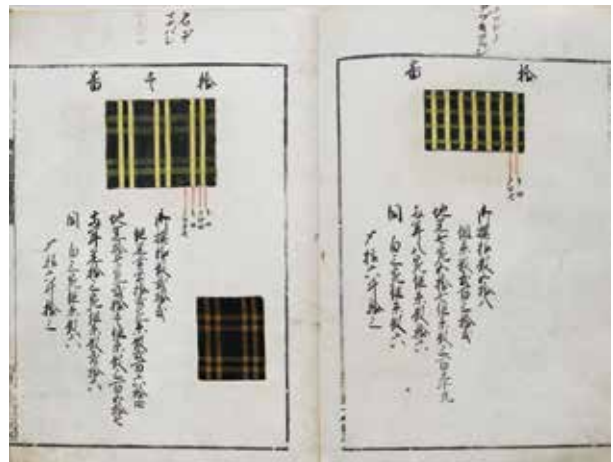


図4 黄八丈の布見本 『八丈実記 三十三』

## II 八丈島流人アーカイブズ

江戸時代になると、徳川幕府の法整備により、伊豆諸島は流刑地として位置づけられた。寛政8年(1796)、幕府により流刑地が八丈島・三宅島・新島に限定された。江戸時代は「文書社会」と言われるほど沢山の文書が作り出され、文書による行政・経済システムが発達した。このことは流人管理も同様で、島出身の地役人や村役人らのもとの徹底して管理されたが、これら流人を管理するために作成された文書類は膨大な量に及んだ。

本コーナーでは、この“八丈島流人アーカイブズ”とも呼べる八丈島流人関係文書類をアーカイブズ学の視点から分類・整理するとともに、安政5年(1858)に同島へ流された菅野八郎<sup>かんの</sup>を例に挙げながら当館が所蔵する八丈島流人関係文書類の全容を紹介した。

詳しくは、本報告書に掲載の工藤航平「八丈島流人アーカイブズの概要調査報告—都有形文化財「八丈民政資料」の伝来と構造—」をお読み頂きたい。

### Ⅲ エキゾチックな観光地の成立

明治40年(1907)5月、伊豆大島が、東京湾汽船(現在の東海汽船)と東京府知事との契約により、本土と「命令航路」で結ばれるようになった。同43年(1910)には八丈島、翌年には青ヶ島へも就航し、伊豆諸島全域にわたる航路が完成した。このことにより、伊豆諸島の島々、特に本土に最も近い伊豆大島は手軽に楽しめる南国情緒あふれるエキゾチックな観光地として人気を集めた。大正から昭和初年には幸田露伴・徳田秋声・宮沢賢治などの文人、東郷青児・棟方志功などの画家も訪れている。

昭和3年(1928)になると、東京ー伊豆下田ー大島間に毎日汽船が就航するようになり、伊豆大島の人気はますます高まった。

本コーナーでは、大島観光の華やかな様子を映し出した「火山口探検ツアー」「砂漠の駱駝」「三原山の傾斜を利用したスライダー」「優秀客船 橘丸」ほか全6枚の写真を展示した。これらの写真は、伊豆諸島地域史研究の第一人者であり、島の教育と高校野球にも大きく貢献された故・樋口秀司氏から、生前、お借りしたものである。

ここでは、樋口氏の編著から「砂漠の駱駝」に関する解説文を以下に引用する。

昭和六年七月三日にゴビ砂漠に生まれたラクダ二頭と満州産のロバー頭が波浮港に上陸し、後に観光客を乗せるために三原山に登場した。(略)

樋口秀司編『伊豆諸島を知る事典』東京堂出版  
2010.5、p.42



図5 「砂漠の駱駝」 樋口秀司氏提供

### Ⅳ 無人島から小笠原諸島へ

小笠原諸島に人が住むようになったのは江戸時代後期以降のことである。それまで、小笠原諸島には人が住んでいなかったことから無人島と呼ばれ、英語でも「Bonin Islands」と表記されていた。しかし、19世紀に入り各国の捕鯨船が頻繁に寄港するようになると、中には島に住み着く外国人も現れるようになった。

こうした状況をうけ、幕府は、文久元年(1861)、外国奉行水野忠徳らを派遣し日本領であることを宣言した。当館は、文久年間に小笠原諸島を調査した調査団の記録である『小笠原島記事』などの地誌類を所蔵している。

明治9年(1876)、国際的にも日本領と承認された小笠原諸島は、内務省による管轄を経て明治13年(1880)に東京府に移管された。昭和19年(1944)6月に父島や硫黄島は米軍による空襲を受け、島民6,886人が日本本土へ強制的に疎開した。翌年2月からは硫黄島の戦いが始まり、2万人を超える戦死者を出す壮

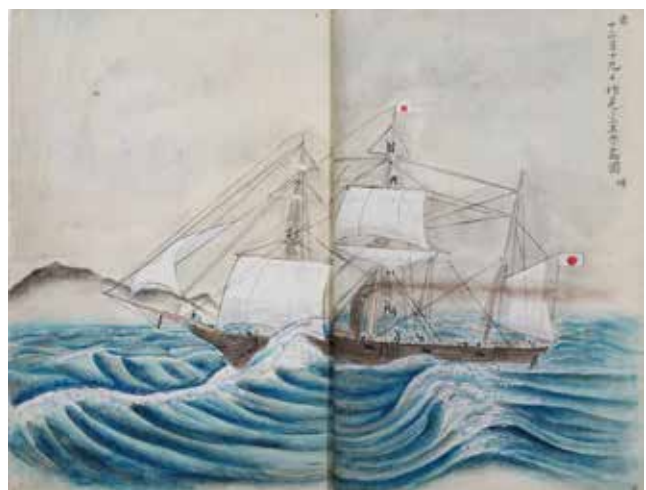


図6 「威臨丸」『小笠原島記事 十九』

絶な戦闘の末、硫黄島はアメリカ軍の占領下に入った。硫黄島以外の小笠原諸島には上陸作戦こそ挙行されなかったものの、補給線を絶たれたため食糧難を招き、200名を超える餓死者が出たといわれている。昭和21年（1946）1月29日、連合軍最高司令官総司令部（GHQ）の指令により小笠原諸島全域において日本の施政権が停止され、アメリカ軍による軍政が開始された。日本に返還されたのは、昭和43年（1968）のことである。

本コーナーでは、小笠原諸島が辿った数奇な歴史に関する記録として、江戸時代の地誌のほか、重要文化財「東京府・東京市行政文書」から『外国関係笠島記事』『小笠原島住民対話書』などを展示した。また、東京都総務局行政部が制作した小笠原諸島の日本返還に関する映像『東京都小笠原村誕生－私の小笠原旅行記』『夢受け継いで50年、未来へ羽ばたけ小笠原』の2本を流した。

## V 伊豆諸島と小笠原諸島の文化財

これまで述べてきたように伊豆諸島と小笠原諸島には、それぞれの歴史の流れの中で、島独特の文化・芸術が生み出されてきた。

例えば、狩野派の絵師の一人として名高い英一蝶<sup>はなぶさいちちょう</sup>は、元々の画号を多賀朝湖と言った。一蝶は、摂津国（現：大阪府北西部・兵庫県南東部）で生まれたが、父が医者として江戸へ出たことに伴い、江戸で様々な芸術に触れることとなる。特に絵画については幕府御用の奥絵師であった狩野安信に師事し、その腕を磨いた。しかし、元禄11年（1698）12月、5代将軍・綱吉の側室を<sup>やゆ</sup>擲したとの罪で三宅島へ流され、宝永6年（1709）まで三宅島・阿古<sup>むら</sup>邑で流人生活を送った。一蝶は流人生活中、いくつかの作品を島に残しており、それらは、現在、国の重要文化財や東京都指定文化財に指定されている。ちなみに、英一蝶という雅号のうち、「一蝶」は三宅島の地に赦免の報が届いたとき一羽の蝶が花と戯れる様子を見て付けたもので、「英」は母親の旧姓である花房からとったという。

本コーナーでは伊豆諸島・小笠原諸島の東京都指定文化財の内、古文書・史跡・旧跡・工芸品・絵画・彫刻などの一部を写真パネルで紹介した。

## 2 展示資料と館内装飾

今回の展示では、江戸時代の人々が地誌類に描いた魚貝類や動植物・風景などの色鮮やかな絵をポスター・チラシ、レンチキュラーポストカード（3D絵葉書）に多用した。ポストカードは、来館者のうちアンケート回答者へお渡しした。



図7 レンチキュラーポストカード



図8 魚のモバイル装飾と「Vコーナー（伊豆諸島と小笠原諸島の文化財）」

また、少し堅いイメージのある「公文書館」がより馴染みある場所となるよう、館内を地誌類に描かれた魚で作ったモビールなどで装飾した。

さらに、幼稚園や小・中学校の夏休み期間に入ると、夏休みを連想させるポスターに惹かれてか、子供が沢山来場した。そこで、より展示を楽しんで頂けるよう地誌類に描かれた絵を使った「塗り絵」を配布した。

魚のモビールや塗り絵は、当館職員が地誌類に描かれた絵をデジタルカメラで撮影しプリントアウトしたものを自分たちで切り貼りして作った。

### 3 おわりに ～アンケート結果から

本展示は、東京都の島々にとって今年が節目のある年であることから、一人でも多くの方に江戸時代から現代に至る島々の歴史と文化に関心を持って頂きたい、という想いで企画したものである。

特に、“八丈島流人アーカイブズ”は、今回の展示にあたり、本格的に史料調査・研究を行い、史料を体系的に整理した上で、分かりやすい展示を目指した。その結果、アンケート回答者の多くから高評価を頂いた。

また、アンケートの結果をみると、初めてご来館くださった方が41.0%を占めた。このうち、「図書館などにおいてあるチラシ」「当館の入口や門扉に掲示したポスター」がきっかけによる来場者が61.8%にのぼった。これもひとえに島々の豊かな自然の恵みと、探究心あふれる江戸時代の人々がそれらを描き残した地誌類のお陰と言えるのではないだろうか。

一方で、「原史料の展示数が少ない」というご意見も多く寄せられた。当館の史料に強い関心を持ってくださる方々のご意見は真摯に受け止めたい。現在、当館は仮移転中のため、いわゆる展示室ではなく閲覧室の中にある仮スペースで展示を行っている。このような環境で、史料の保護という観点から、彩色がほどこされた史料を一度に展示することを控えている。これまで、展示環境により原史料を展示しづらい場合は複製物による展示を行ってきたが、より一層の工夫が必要である。

いずれにしても、本展示が東京都の島々に関心をもつ契機となったのであれば幸いである。